

# 三年坂

## カット／かわもち

1

ハツ・ハツ・ハツ——  
荒い呼吸が耳に響く。

タツ・タツ・タツ・タツ——  
靴の音も耳に響く。

それらは、僕とバリー先輩のものだ。

薬物強化された容疑者を追いかけて始めてから、もう、かなりの時間が過ぎたように思う——ちゃんと時計を見ていたわけじゃないから、確かなことは言えないけど……。

「六道、バテたら承知しないから……」  
ついつい足が鈍りがちになる僕に、バリー先輩の櫛が飛んでくる。

僕達が、その容疑者を見かけたのは、偶然だった。

普段、昼食は、署に配達される定食で済ませているのだけれど、たまたま昨日が給料日で『たまには外で昼飯にしようぜ』という先輩の提案で1ブロック離れたところにあるカフェテラスに出かけた。

天気はいいし、暑くもなければ寒くもなく、穏やかな風が吹くカフェテラスでの食事は、本当にのんびりとしたものだ

った。

カフェテラスからの帰り道、手配書で見た記憶のある容疑者に会わなければ、のんびりとした気分はまだ続いているはずだったのだ。あるいは、手配書の写真を記憶していなければ……。

でも、僕たちは気づいてしまった。

やはり、それが、刑事の刑事たるところだろう——僕達が見かけた時、容疑者はかなり容貌が変化していたのだけれど、それでも『間違いない』とわかってしまったのだ。

そこから、僕達の追跡は始まった。

相手も僕たちも徒歩だったから、バリー先輩と二人で追いかければ取り押さえられるだろうと走り出したのだが、なかなか追いつくことができない。

相手は薬物で肉体を強化しており、それに比例して筋力も持久力もアップしているようで、距離は縮まるどころか逆にじりじりと開いていくように感じる。このまま長引けば、逃げ切られてしまうかもしれない。

追跡を始める時点で、署に連絡をして、応援の人と車の手配を依頼したから、もう到着してもいいころだと思っただが、まだ来ない。

僕達の現在地点はGPSで把握できてはるはずなんだけど。史跡公園のほうに向かっていることだってわかっているはずなんだが。

「六道、向こう側に回れ！」

バリー先輩の意図は『挟みうちにしよう』ということだ。公園に着くまでには取り押さえようと。

ちようどお昼休みのこの時間帯、公園にはたくさんの人が  
思い思いの休憩時間を過ごしているはずだ——僕の知る限り、  
公園から人影が消えるということはない。もし、公園でくつ  
ろいでいる人たちに危害が加えられるようなことになってし  
まったら、あるいは、誰かが人質にとられるようなことにな  
ってしまつたなら……。

パーリー先輩もそのことを恐れているに違いない。  
僕は表通りを走って行く先輩と別れて一すじ内側に入った  
通りを走る。

史跡公園に向かってなだらかな上り坂になっている道の両  
側にはイチョウの木が植えられている。秋になれば、黄色く  
色づいた葉がひらひらと落ちて、恋人たちには人気のある場  
所になるだろう。

でも、今の僕にはちよつとした上り坂も辛い。  
足を運ぶペースも落ちてしまう。

(三年坂だな、この道……)  
道路の脇に表示された地名を記憶に刻む。あとで報告書を  
書く時に必要になるだろう。

(でも、なんだか不思議な名前……なにが三年なんだろう?)  
地名だけは聞いたことがあつても、どうしてそんな名前に  
なっているのかわからない。でも、一瞬心に浮かんだ疑問を  
長く考えることもできない。今はただ、容疑者を捕まえるこ  
とに集中してはなくて。

それに、呼吸が苦しくて、一つの事柄を考えている余裕も  
ない。

その時、目の端に黒い影が動いた。

(仲間がいたのか?)

容疑者を助けようとする人物がいるのなら——  
共犯者がいるのなら——

方針を変える必要があるかもしれない。

そうではなく、一般の市民が通りかかったのなら、巻き添  
えをくわないように注意を促す必要がある。

僕は黒い影が何(あるいは誰)であるのか確かめるために、  
足は前に向けたまま首だけひねって影のほうを見た。

途端、足の下から地面が消えた。

コンマ一秒もないくらいの短い時間だけ宇宙遊泳の体勢に  
なる。

すぐさま、重力の虜になる。

つまりは、転んだのだ、実に見事に。

(黒い影は?)

上体を起こして影がよぎつたほうを見たが、その時にはも  
う何もなかった。

もし、そこに何かが、あるいは誰かが潜んでいたなら、僕  
は痛みを感じている暇もなかったかもしれない。けれど、何  
も見つけることができなかったせいで、自分の状態を観察す  
るゆとりができてしまい、ズボンの膝のところ穴をあけて  
しまったことと、掌から肘にかけての広い範囲に擦り傷を作  
っていることに気づく。

(痛い……)

痛いと同時に情けない。

子供の頃は別にして、この十数年間というもの走って転ん  
だなどということはなかったのだが……。

顔を上げた僕の目に小さくバーリー先輩の姿が映った。どうやら、先輩は表通りから史跡公園のほうに回りこんできて、そこで容疑者を取りおさえたようだ。

(よかった……先輩が捕まえてくれて)

僕が転んでしまつて逮捕の役には立たなかつたという事実に変化はないけれど、もしも、容疑者に逃げ切られていたら、傷の痛みだけでは済まないところだった。

(やっぱり、バーリー先輩つて、現場の経験が長いだけのことはあるよな)

ようやく到着したパトカーの回転灯の赤い光を見ながら、そう感じていた。

## 2

その日、部屋に帰るとネットの端末に「メールあり」を示す緑色のランプが点っていた。

発信場所の表示は月を表わす『L』になっている。

(もしかしたら、ジョーカーかも……)

あまり過度な期待はかえて失望を大きくするだけだと知ってはいるけれど、やはり期待してしまふ。実のところジョーカーに「さよなら」を言われてから今日まで一行のメールも届いてはいないのだけれど……。

僕は急いでメールを開いた。

【六道リインに告ぐ】

僕宛のメールだから、名前が出てくるのは当然のことだが、なんだか嫌な予感がする。このまま読まずに閉じてしまえば

いいのかもしれない。でも、読まずにおくには怖すぎる——知らずに過ごしてしまつてはいけない事柄が書かれているような気がする。

僕は小さなトゲが喉にささっているような気分のまま次の行に進んだ。

【これは、虚偽でもなければ、脅迫でもない。純粹に君の身を案じるが故の警告である】

メールは、更に、きょう僕の身に起こつたこと(つまり派手に転んでしまったこと)について、現場に居合わせた人間でなければ知りえないような細々とした事柄を少し古めかしくて居丈高な表現で綴っている。そして、その時、一瞬心をよぎつた疑問に関しても述べている——三年坂という名前がいかにして付いたのかを。

【この坂で転ぶと3年以内に死亡する、という伝説の故に三年坂と呼ばれている】

(3年以内に死亡?!)

冗談じゃない! たかだかこんなことで寿命を区切られてはたまらない。

僕は笑い飛ばそうとしたけれど、こころなしか肘と膝の傷の痛みが増したような感じがする。

(いけない。これじゃ自己暗示にかかつてしまふ)

こんなことで自己暗示にかかつていては、メールの送り主の思うつぼだ。もう、ここでメールを閉じてしまわなければいけない。理性は僕にこれ以上読まないようにと命じるのだが、目は次の行・次の行へと進んでしまふ。

【400年以上昔・江戸時代の記録によれば——】

メールの送り主は、日本がまだ一つの国だった頃の事例から長々と書き連ねた後に、一つのトリッキイな話を紹介していた。

曰く――

江戸時代も末の頃、商家の隠居、久左衛門がこの坂で転んだ。彼はひどく縁起をかつぐ人物で、青い顔をして帰ってくるなり『ああ、あと3年の命』と布団をかぶって寝込んでしまった。家人たちがそれは迷信だと慰めても聞き入れない。そこへ幼馴染の弥藏老人がやってきて、『それなら、あと十回ほど転んでくればいい』と言う。『1回転んで3年の命なら、2回転べば6年、3回転べば9年と死期は延びていくはずだから』と。これを聞いた久左衛門はさっそく起きだして三年坂へ向かったという――何度も転ぶために。

【君にも十回ほど転ぶことをお勧めする】

メールはそこで終わっていた。

(そう……か)

メールの内容全てについて納得したとは言いがたい。それでも「三年坂」の名の由来については、その通りだったのだと思う。遠い過去に何件かの不幸な事故が重なって、言い伝えとなり、戒めの意味をこめて地名になったのだろう。だからこそ、今日まで地名変更もされずに何百年も続いているのだと思う。

(いくら過去にいくつかの事例があったにしても……)

二十二世紀も末になろうというこの時代、科学的根拠のないものに囚われるなんて馬鹿げている。

そう思う端から

(今もなお科学では説明のつかない事柄も確かに存在しているんだよな)

少しでも気にかかる事があるのなら、そして、それを解決する方途が示されているのなら、素直に従っておいたほうがいいのかもしれないと感じる。

こんなふうと考えてしまうのは、そばにジョーカーがいないう寂しさのせいなのかもしれない。

(とりあえず三年坂まで出かけてみようかな)

いかに史跡公園は一日中人通りがあるとはいっても、夜遅い時間になれば三年坂あたりの人影は途絶えるだろう。それに、僕はただ出かけてみるだけで、転んでみるというわけじゃないんだし……。

誰にもなく言い訳気分になっている自分に気づく。

なんだか、こうした心の動きもメールの送り主の意図するところではないか、とも思うけれど、この際、細かいことは考えないようにしよう。本当に僕のことを心配してメールを送ってくれたのかもしれないんだから。それに、昼間たまたま現場に居合わせただけの人なら、今から僕が出かけたって出会うはずもないんだし。

3

夜の三年坂は、静かで明るい。

史跡指定の建造物をライトアップしている光で、坂のあたりまで明るくなっているし、そもそもニュー・トーキョーは、全体として夜も明るい街だ。それでも、公園のもつ雰囲気

せいも落ち着いた明るさに見える。

公園に向かう人の姿も、公園から帰る人の姿もない。

今から公園に行くには少し遅く、帰るにはまだ早いといった微妙な時間帯に僕は来てしまったのかもしれない。

(誰もいないんだな)

なぜだか、自分自身に確認してしまおう。

誰もいなければ、どうしようというのか。

大昔の人のようにこの坂で何度もわざと転んでみようというのか。

迷信だと知っていて、なおかつ転んでみようというのか——  
—気にしなければ何でもないことなのに。三年坂の由来を知らなければ気にならないことだったのに。

僕は周囲を見回した。

誰もいない。

誰か通りかかってくれたいことを望んでいるのか、それとも誰も来ないことを望んでいるのか、それさえもわからなくなる。

部屋を出てくる時から迷っていたけれど、今は更に自分の心がわからない。

僕はもう一度周囲を見渡した。

やはり、誰もいない。

(とりあえず一回だけ)

促す声が僕の中から聞こえる。

わざと転ぶというのも、実際にやるとなると何故か難しいもので(どっちの足から出せばいいんだっけ)とか(昼間けがしたところを打たないようにしなくちゃ)とか考えてしま

い、動きがぎこちなくなる。

擦り傷ができている掌をかばうように指先に力を入れ、ゆっくりと転ぶ。転ぶと言うよりも受身を取ったと言うほうが正しいかもしれない。それでも、これだって一回は一回だと思おう。

顔をあげて周囲を見回す。

やはり誰もいない。

(よかった)

事情を知らない人がこの場面だけ目撃すれば、僕はただの『変な人』だ。

(この調子なら、もう一回転んでみてもいいかも……)

思いながら立ち上がった僕の目の隅に黒い影が動いた。

昼間と同じ影だと確信する。証拠も何もないけれど、同じ影だと直感が告げる。

ツ——

影が動いた。

昼とは違って僕のほうにやってくる。明確な意思をもって僕のほうにやってくる。

坂の中央に現れたのは、筋肉質で均整の取れた身体を黒いボディスーツに包み込んだ存在だった。

(S・A！)

黒い影の正体はS・Aだった。

やはりこういうことになるのか、と妙に納得している自分がいる。

彼に直接問いただしても答えてもらえやしないだろうけれど、昼間の影もS・Aに違いない。

「ふん、こんなところで転んだりして…何をしているのかな、六道リン？」

冷やかな口調でS・Aは言う。

僕は返すべき言葉を見つけれない。

三年坂の言い伝えを話せば、非科学的と片付けられてしま  
うだろう。僕自身だって、非科学的だと感じていたのだから。

それに、迷信に負けたと思われるのも癪にさわる。

「まさか、言い伝えを本気にしたわけじゃないだろう？」

「——！」

今こそ僕は確信した——メールの送り主もS・Aだと。

強い暗示力をもつように文章を組み立てていたのだと。

そのせいで、僕は自分の意思さえもあやふやになり（それ  
とても元々から意思が弱かったせいだと言われてしまえばそ  
れまでのことだが）フラフラとここまで来てしまったのだと。

発信元を示す『L』の文字に月からだと思いついたのだと。  
たけど、一度、月面基地を経由して送られてきたとすれば、  
地球上のどこからであろうと、あるいは、宇宙空間からであ  
ろうとも『L』の文字を表示することは可能だったのだ。そ  
んな手の込んだことをして、S・Aに何のメリットもないだ  
ろうと思ひもするのだが…。

返事に窮する僕を見てS・Aは唇の端をわずかにあげる。

シニカルな、それでいてどこか淋しい表情だった。

「迷信を気に病むあたりが六道の六道たるどころ…か…」

（こんなふうに僕に意地悪をするのがS・AのS・Aたると  
ころなんだな）

僕は心の中で言い返した。

それに——

1回転んだところにS・Aが登場してちようどよかったの  
かもしれない。もしも誰も来ないまま十回以上転んでみたり  
しても、僕は結局のところ納得しきれないままだったろう。

何となく割り切れない思いが残っただろう。  
もつとも、三年坂の由来を知らなければ、何も起きなかつ  
たというのも事実ではあるのだが。

それも今は善意に解釈しておこう——転んでから2年あま  
りも過ぎた頃に由来を知ったならもつと複雑な気分陥つた  
かもしれないと。やはり、メールは僕の身を案じるがゆえの  
警告だったのだと。



やっぱり 六道ってバカ…

